取材：山中弘行　撮影：編集部　　取材協力：東京・クロサワ楽器“G-CLUB TOKYO”

“熟成された新作”

Gibson ES-175プロトタイプ誕生ストーリー

最先端技術と情熱を込めたコンストラクションの結晶

3月8日、東京・クロサワ楽器“G-CLUB TOKYO”にギブソン・カスタムのメンフィスとナッシュヴィル両ファクトリーから要人が来日し、ギブソン・ファンを集め、特別セミナーを開いた。1月にアメリカ・アナハイムで開催されたNAMMショーで、多くの注目を集めたフル・アコースティック・ギターES-175のリイシュー・モデル「ES-175プロトタイプ」(正式なモデル名と発売日は未定)をプロデュースしたマイク・ヴォルツ氏(ギブソン・カスタムショップ・メンフィス)も来日。製作のために、自身でヴィンテージのES-175を購入し、研究したという彼に製作のいきさつやスペックなど、詳細についてじっくり話を聞いた。

NAMMショーで話題を集めた「ES-175プロトタイプ」。詳しい発売日は未定だが、詳細がわかりしだい本誌でお伝えしよう。なお、この1ピックアップ・タイプのモデルの他、2ピックアップ・タイプの「ES-175D」も同時発売される予定だ。

ギブソン・メンフィス・ファクトリーとESシリーズの関係

1894年、アメリカ・ミシガン州カラマズーにてオーヴィル・ヘンリー・ギブソンがマンドリン製作を始めたのがギブソン社の起源であり、同社は以来118年の長きに渡って世界中にギターを中心とする楽器を供給し続けている歴史的な老舗だ。そして1974年から1984年までの約10年をかけて、本社を誕生の地カラマズーからテネシー州ナッシュヴィルに移した。

今回、貴重な話を聞かせてくれたマイク・ヴォルツ氏は、1984年にナッシュヴィルのギブソン社にルシアーとして入社し、現在はリサーチ&デヴェロップメントの責任者として、メンフィス・ファクトリーでESシリーズを開発している人物。彼の前職は、「Gruhn's Guide to Vintage Guitars」の著者としても名高いジョージ・グルーンの工房のスタッフで、数多くのヴィンテージ・ギターなどのリペアを行なっていたというから、まさに同社が必要としていた“ギター製作を知りつくした人材”であったことがわかる。しかも入社後に任されていたのがチェット・アトキンス(g)のためのギター製作であり、アトキンス本人との親交も深く絶大な信頼を得ていたことからもルシアーとしての彼の技量の高さが理解できる。

さて、メンフィスとはどのような街なのだろうか。ヴォルツ氏によると、たった200マイルほどしか離れていないナッシュヴィルがカントリー・ミュージックの聖地であるのに対して、メンフィスはブルース、ロカビリー、ロックン・ロール、ソウル、ロック、ゴスペルなどの音楽がメルティング・ポットのように混在しながら溢れる一方で、毎週土曜日の夜にはアメリカ最古のカントリー・ミュージックのラジオ番組である「グランド・オール・オプリ(The Grand Ole Opry)」に街中が耳を傾けるという素晴らしい音楽の街だそうだ。

そんな街にあるギブソン・メンフィスは、約70人ほどが勤務している比較的小規模なファクトリーだが、仕事への情熱に溢れる技術者たちは、しばしば時間を忘れて遅くまで製作を止めないのが悩みだとヴォルツ氏は語るが、彼の目は誇らしげだった。昨年12月、エルヴィス・プレスリー(vo,g)のバックでギターを弾いていたスコッティ・ムーア(1931年テネシー州生まれ)をメンフィス・ファクトリーに招き、彼の愛器である1952年製のES-295(175と同じシェイプのゴールド・ボディに白いP-90ピックアップを2基搭載したモデル)をリイシューしたギターをプレゼントし、夜中までパーティを開いたと実に楽しそうに話してくれた。ムーアが実際に使っていたES-295はファクトリー内のガラス・ケース内に大切に保管されているそうだ。

このメンフィス・ファクトリーでESシリーズが製作されている理由を聞いたところ、カラマズー時代から使用してきたESシリーズを作るための種々の機械がメンフィス・ファクトリーに設置されているためだそうで、とりわけプレス・マシンは、“Ancient(古代)”で“Huge(巨大)”なために簡単には動かせないとのこと。「メイプル/ポプラ/メイプル」から成る3層のプライウッドは、このプレス・マシンによって1度にトップとバック両方を、熱と圧力でプレスしてあの独特のカーヴを形成するのだが、割れなどを防ぐためには適正な湿度管理が必要であり、とても重要な工程だとのこと。サイド板については肩幅ほどあるプライウッドを同様に専用のプレス・マシンで形成加工したあとにカットしていくというとても興味深い工程だ。

ヴィンテージのES-175を徹底的に分析して製作されたプロトタイプ

今回、ヴィンテージのES-175を再現するにあたり、ヴォルツ氏は奥方の“懐疑の眼差し”や“厳しい追及”に対して「仕事だから」と説得して、ヴィンテージ・モデルを自身で

ギブソン・カスタム・メンフィスで、リサーチ＆デヴェロップメントの責任者としてESシリーズを担当しているマイク・ヴォルツ氏

購入して微に入り細にわたって研究を行なったと言う。その研究の成果がこのプロトタイプには活かされている。他の年代との大きな違いは、外観上は分からないが、サイド板にあった。一般的にES-175のボディはサイドも含めてプライウッド仕様だと思われている。しかし、50年代後半から60年代初めにかけて、サイド板だけにソリッド・メイプルが使用されていたことが判明した。加えてサイド板の強度を確保するために何本もの“リム・ステイ”での補強が行なわれていたと言う。これはソリッド材をサイドに使う場合に一般的に使われる手法で、プライウッドであれば必要のないパーツであり、発見したときには驚き、現在“なぜこの時期のES-175だけソリッド・メイプルが使われたのか”について歴史的背景の研究も開始したそうだ。

さらにカッタウェイ部のシェイプの差異についても触れ、鋭く切れ込みながら巻き込むようになっていることに気付いた。またフィンガーボードも他の年代より薄く、ボディ上にかかるフィンガーボードを支えている部分のシェイプが“S字状”に加工されていることも発見した。その他にもヘッドの形状の違い、ボディ内部のマホガニー材のテール・ブロックの大きさの違いや、ブレイシングの形状の微妙な違い、もちろんネック・シェイプに至るまで、実に細やかな部分まで徹底的に分析し、忠実に再現されている。ヴォルツ氏によれば、これらすべての違いが当時のES-175のサウンドを特別にしている理由であり重要だと言う。

外見上では58年から導入されたジグザク・テールピースの採用がある。これを再現するために当時の道具を探し出し、手作業で太い金属を曲げて、ようやく4個作ったというからその探究心には脱帽だ。搭載されているピックアップは音色の再現に最も適していた現行の「57 Classic」で、カヴァーはしっかりとエイジド加工が施されている。ストラップ・ピンまでもが当時の仕様と同様のものが採用されている。また、バインディングついては他のモデルと同様に手作業で行なわれているのだが、その厚さまで再現するというこだわり。サンバースト塗装も手作業によるとのこと。

もちろんメンフィス・ファクトリーにも、コンピュータ制御により正確にボディなどを切り出すCNCマシンや、弦を張った状態でネックやフレットを正確に計測し、さらに擦り合わせなどの調整からナット製作までをも自動的に行なうPLEKなど最新の加工機器が装備され、ギター製作の精度の飛躍的な向上に寄与している。これらを使えば、まったく同じ形状のギターがクローンのように製作できると言う。

一方、前述の作業など手作業による工程も多く高いクラフツマンシップが不可欠であり、最新機器を使う場合でもクラフツマンとしての高い意識がなければならない。ギターを作る秘訣を尋ねてみると、使用する木材の厳選と、“Construction”(細部にわたってていねいに組み上げて行くこと)であるとヴォルツ氏は語る。今回公開されたプロトタイプはまさに、これらの最先端技術と情熱を込めたコンストラクションの結晶とも言えるモデルだ。

現在の世界的な不景気の中にあっても、ギブソン社は世界中で売り上げを伸ばしていると言う。その理由はブランド力と品質の高さによるものだが、ヴォルツ氏によると全社一丸となって“どの時代にあってもギブソン・ギターはトップでいなくてはならない”と言う強い信念が浸透しているからだと語ってくれた。■

ES-175

Gibson ES-175 プロトタイプ

Closeup

自然な経年変化を再現したボディ・トップ。今回、ヴォルツが入手したオリジナルのES-175は、通常プライウッドと思われていたサイドに、ソリッド・メイプルが使用していたことが判明。このプロトタイプも同様の材を使用している。

元になったオリジナルの個体は、フィンガーボードも他の年代より薄く、ボディ上にかかるフィンガーボードを支えている部分のシェイプが“S字状”に加工されていることもわかった。

当時のES-175には、P-90に変わりギブソンが1957年に発表した「PAF」と呼ばれるハムバッキング・ピックアップが搭載されていた。プロトタイプには、音色の再現に最も適している現行のハムバッキング・ピックアップ「57 Classic」を使っている。

58年から導入されたジグザク・タイプと呼ばれるテールピースを採用。これより以前はトラピーズ(ブランコ)タイプが使われていた。今回、当時の道具を使用し、手作業で太い金属を曲げて製作したというこだわりのパーツだ。